

### 三井物産環境基金 2010年度研究助成－社外案件選定委員による総評

三井物産環境基金を環境保全にどのように有効に活かせるか、同様の基金が他にも多くある中でこの基金の特色をどのように発揮するか、応募案件にどのような考え方で適正配分を行えばよりよい成果を得るか、さらにはその成果を社会にどう効果的に普及してゆくか、基金運営の立場から常に考えて置かねばならない課題です。

本基金による研究助成は、「持続可能な発展」を実現することを目的としています。年間総額は3億円程度であり民間研究助成ではかなりの額といえます。また国の研究費と異なり、縦割り制約がなく、比較的柔軟な利用が可能であるという特色をもちます。これまでは、研究課題に特別の方向性を与えることなく提案を募っていましたが、4年間の実績を踏まえ、本研究助成が更にその特色を活かし、社会的責任を全うするという観点から2010年度募集に当たって次のような応募方針を定めました。

すなわち、本基金支援対象として優先する環境研究とは、明確に問題解決型研究であり、具体的な提言を含むものとし、基本的な領域として設定している「学際・総合/政策研究」「国際共同研究」「未来志向研究」の中でも、特に「学際・総合研究」を重視しました。また、高額なA区分の応募案件に対しては面接審査を行うこととしました。

その観点・手順から2010年度研究応募案件を評価選択し、以下のような所感を得ました。

- 1) 概ね、学際・総合を意識した提案が増えました。しかし全体に急ごしらえのチームあるいはこじんまりまとまった地域研究が多く、問題設定がしっかりしている提案が多いとはいえませんでした。
- 2) また、世界的な課題で核心をつく国際提携での未来志向型の挑戦的な研究提案（例えば、環境資源・エネルギー関連研究、成長の限界型、Rio+20への提案など）がまだ見られません。特に金額が大きいA区分研究に、本研究基金の特色を活かしたFlag Ship的な研究がほしいと感じました。日本の研究界全体に、さまざまな枠を超えての大きな課題解決に向けた総合研究を醸成する基盤が不十分なのではないでしょうか。
- 3) 金額区分の最大まで予算を積み上げているが、必ずしも必要性が認められない項目の計上があり、本当にやりたい研究内容が何なのかに疑問を持たせるような提案も多くなりました。枠の設定がかえって詰めの甘い提案を誘導している可能性があり、枠の設定なしでもよいかもしれないと感じました。
- 4) 本助成はその特色を活かして国の研究基金と相補い相乗効果で研究成果とその社会影響を強めることが望まれますが、国の研究費の落穂拾いの研究提案も多くありました。また地域研究などでは一定期間の研究後、地域に確実に移転され持続する提案でなくてはなりません、単なる学術的研究や対症的提案で終わると見られる提案もみられました。
- 5) 萌芽研究のカテゴリーでの選定は56件中8件となりました。標榜されたように新たな学問領域を切り開くとまでは行かないものの、特色ある研究が選ばれており、今後いい使い方が出来る望みがあります。
- 6) 全般的にまだ、新たな方針を十分満足させる提案・選定にまで至っていません。しかしその方向で当分続けることで本基金独特のものへと進化してゆくと期待されます。